

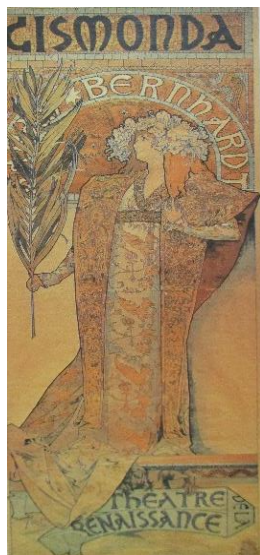
ミュシャ Mucha と日本 日本とオルリク Orlik

千葉市美術館 2019. 09. 07～10. 20



本展覧会は、「2020年の日本とチェコ交流100周年」記念として、チェコ出身の二人のアーティスト「アルフォンス・ミュシャ」と「エミール・オルリク」に焦点をあて、ジャポニズム（日本趣味）の時代に出発した彼らの作品と彼らから影響を受けた日本の作家たちを取り上げている。

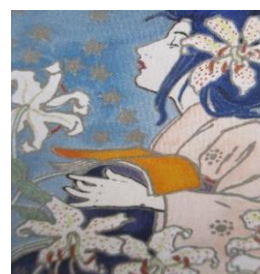
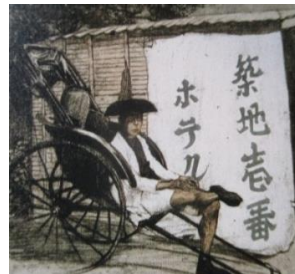
さらに「オルリク」に木版画を学んだドイツ語圏の作家のグラフィックを舞台に展開して、東西の影響関係を観察するという企画で開催されている。



「ミュシャ」（1860～1939）は、女優「サラ・ベルナール」を描いた《ジスモンダ》（1894年）が、“枠からはみ出した左肩や体に沿って付けられた影などが立体感をもたらし、堂々とした佇まいと相まって女神の彫像のようであり、“女性・花・異国情緒”の3要素が認められている“のが特徴である。

画伯はジャポニズムに湧くパリで始まる一連のポスターで一躍有名になり、“色調とビザンティン風の装飾”は、たちまち人気の的となった画家である。そしてその評判は、直ぐ日本に伝わって、画伯の女性像は雑誌『明星』で紹介されて、白馬会を中心とする日本の画家たちの「藤島武二」や「中沢弘光」らの本邦の画家たちに絶大な影響を与えたという。

本展は、二人の作品に加えて、背景としてのチェコのジャポニズムの紹介やウィーン分離派の周辺作家などの作品を、雑誌『明星』や『方寸』周辺の作品と合わせて、グラフィック作品ならではの東西の芸術交流の様子を紹介している。



- エミール・オルリク 《東京の通り》 版画集日本便りより 1900年頃 石版・紙
エミール・オルリク 《築地第一ホテルの前の人力車》 1900年頃 石版・紙
中沢弘光 《絵葉書「美人と感覚」》 1905年 木版・ステンシル・紙